

ソハキリ初見の「常明寺」を探す
～ 2月3日は江戸蕎麦記念日 ～

ほしひかる*

「夢の常明寺」— 蕎麦界では江戸における蕎麦切初見の寺として有名だ。であるのに、その所在地は未だ解かっていない。だから、「夢の…」とか「幻の…」とか「謎の…」とかの冠を付けて呼ばれている。

その初見資料は何か？ といえば、『慈性日記』という江戸初期の京の僧侶が書き残した日記だ。記事は下記のようなメモていどだから、想像力を要する。

慶長十九年(1614年)二月三日

「常明寺へ、薬樹・東光にもマチノ風呂へ入らんとの事にて行候へ共、人多く候てもとり候、ソハキリ振舞被申候也、」

○訳すると、こうなるだろうか？

慈性は友人の薬樹院・東光院と一緒に常明寺に行った。そこで「江戸の町にも風呂屋ができたから行ってみよう」ということになって出かけたが、混んでいたのも、また常明寺へ戻って、蕎麦切をご馳走になった。

○あるいは、行く順番が違って！

東光院が「江戸の町にも風呂屋ができたから行ってみよう」と誘ったので、三人は出かけたが、混んでいたのも、急きよ常明寺へ行って、蕎麦切をご馳走になった。

もう少し詳しく見てみよう。

1.慈性(1593～1663)とは？

日記の書き手慈性は、天台宗門跡寺院青蓮院の院家尊勝院(京都市東山区粟田口)第22代住持。祖父は日野輝資、父は日野資勝、母は烏丸光宣の娘という血筋のいい家系である。

1614年、彼は江戸城で天台論議が行われるというので、その聴聞のために江戸へやって来た。若干21歳であるが、日記は江戸に来たときから始まっている。

この慈性のことを蕎麦業界では、よく「多賀神社の社僧」と紹介してあるけれど、これは間違っていないが、正しくはない。というのは、多賀神社の方は兼務であって、あくまで本職は尊勝院の住持である。多賀神社の方は、祖父の輝資が若い慈性が食えるようにと、家康に頼みこんで見つけてきたアルバイト先である。そもそもが江戸行きも祖父の可愛い孫指導の一環のようである。こういうところからも慈性の人となりや、日野ファミリーの様子が何となく想像できるというものである。

2.薬樹・東光とは？

近江坂本の薬樹院(大津市坂本)久運と、江戸の東光院(現:台東区西浅草)詮長のことを指し、同じ天台宗の仲間であるところがポイントである。

東光院の略史によると、東光院は慶長年間(1596～1615)に、常盤橋御門の北から小伝馬町へ移転したとあるから、慈性が江戸に来た1614年はどちらに在ったかは判らない。ただ、当時の詮長の活躍からすれば、幕府の指示にしたがってすでに移転していた可能性は高い。その東光院に慈性は宿泊していたようである。

江戸に来た慈性は、幕閣や宗教界の大物たちとよく人と面会している。専ら人脈作りに勤しんだ感であるが、それも祖父の指導であろう。

たえば、目的の江戸城はいうまでもないが、海や友人の詮長とは幾度となく行動を共にし、堀端)、家康側近・本多正信、武蔵国鳩ヶ谷藩主・阿部正次、伊勢津藩主・藤堂高虎(上屋敷:向柳原町)、長門国長府藩主・毛利秀元(上屋敷:麻布日ヶ窪)ら幕閣、他に知足院(湯島)、湯島天神(湯島)、伝通院(小石川)、天台宗浅草寺(浅草)、増上寺(芝)、などをせっせと訪ね歩いている。

常明寺は、こうした慈性の行動範囲内にあるのだろうし、何よりも天台僧が三人揃って行った常明寺もきっと天台宗であったろうと推察される。

ただし日記には、常明寺は1回しか登場しないから、縁遠い関係であったのかもしれない。

「怪僧」と呼ばれた天台宗無量寿寺(河越)の天また上野国厩橋藩主・酒井忠世(上屋敷:大手外



【慶長十九年の江戸城】

3.江戸の風呂とは？

江戸に初めて風呂屋ができたのは1591年である。伊勢与市が銭瓶橋(大手町2-6:常盤橋と呉服橋の間)の傍で開いた。記録によると蒸風呂だったという。

慈性が江戸に来た1614年ごろ、江戸は新都作りにフィバーしていた。風呂屋・湯屋も街々にできて、湯女まで現れ始めたころであった。

元々、風呂というのは寺社から始まったといえる。それがお金を払って入るようになったのが、風呂屋だ。だから、三人の僧侶にとっては風呂自体は珍しくないはずだ。それをわざわざ行こうというから、面白味がなければならない。「江戸も馬鹿にしたもんじゃない。今度、湯女がいる風呂屋ができたから」とか何とか言って、江戸人の詮長が誘ったのだろう。現に、慈性は有馬に行ったとき湯女を呼んだりしているから、的外れではないと思う。それに、「混んでいた」というから、そこからも江戸の賑わいが想像できるというものである。がっかりした三人は、風呂に入るとき脱いだ衣を包む布を持参していたが、それを使うこともなく、ブラブラと戻ったというわけである。ちなみに、「風呂敷」は風呂に入るときに脱いだ衣服を包むところからそう呼ぶようになった。

ともあれ、そんなことを想い描いていると、風呂屋と常明寺は近かったということになるだろう。

4.当時の蕎麦切は？

では、彼らが食べた蕎麦切がどんなものだったか？

これは1614年二月三日の記録だけでは掴みようがないが、幸い慈性は12年後の1626年八月十八日に自邸の数奇屋で茶会を設けている。

「東條安長殿・花房正栄殿・内藤采女、尊勝院数奇にて茶申入候、後段蕎麦切、夜入五つ時分御かへり候也。懸物は宗熙春甫花生・占唐・茶碗・聖蹟何も借用物、」

記事中の安長は(?~1637)・正栄は義叔父に当たるが、蕎麦切は後段で振舞われている。

この尊勝院の数奇屋における茶会と風呂屋帰りの常明寺は、多少の違いはあったかもしれないが、それでも後段に蕎麦切が振舞われた可能性はある。なぜならば伝統の《寺方蕎麦》の形式は、存在していたはずと思われるからだ。この《寺方蕎麦》の形式については後日、別稿で述べる機会があるだろう。

5.1614年という年は？

慈性らが蕎麦切を食した慶長十九年(1614年)は大坂冬の陣が起きた年として有名であるが、

徳川幕府を盤石とするためにつ家康公を「神」とする布石が着々行われていた年でもあった。下記の年表をご覧ください。家康は天海(1536～1643)にその任を託した足跡がよく読み取れる。

天正九年(1591年)	伊勢与市、銭瓶橋で風呂屋を開業。
慶長十年	秀忠、徳川二代将軍に。
慶長十六年七月	天海、川越の星野山無量寿寺の住持となる。
慶長十七年七月	無量寿寺北院を改め喜多院の号を賜る。
慶長十八年正月	天海、駿府に滞在し家康に天台論議を催す。
慶長十八年八月	喜多院を「東叡山」と称する。
慶長十八年十月	天海、日光山の別当に補せらる。
慶長十九年正月	天海、江戸城に登る。
慶長十九年二月三日(1614年)	慈性・詮長・久運ら常明寺にて蕎麦切を食す。
慶長十九五月	天海、家康に天台血脈を相承す。
慶長十九年(11月)	大坂冬の陣
慶長二十年(元和元年・1615年)正月	天海、家康に山王一実神道を授く。
慶長二十年(1615年5月)	大坂夏の陣、豊臣氏滅ぶ。
元和二年四月	家康、死後の祭祀を天海に遺言す。
元和二年四月十七日	家康、薨ずる。

ここでは「東叡山」に注目してほしい。「東叡山」というのは、「東の比叡山」という意味である。もちろん「東」とは「首都江戸」を指す。それゆえに実質上、天台宗の総元締めを許すということになる。

かようにして、一大徳川絵巻の作成者役を家康から一任された天海は着実に手を打っていく。言葉を換えれば、「天台宗」の花が江戸において花開こうとしているころであった。

78歳の天海、人生最後の大事な仕事である。そして江戸の詮長は天海に協力し、慈性もまた天海に従っているのであった。

6.もしや常明寺？(1)

さて、一番の目玉の「夢の『常明寺』は何処か？」

当初私は、常明寺は山王社(現：赤坂の日枝神社)の塔頭の一つである『常明院』だと推定していた。

理由は、神仏習合であった江戸時代の山王社は天台宗の寺社であったことと、何よりも山王社は江戸城と縁が深かったからだ。

その縁を説明するには山王社の由来に触れなければならない。

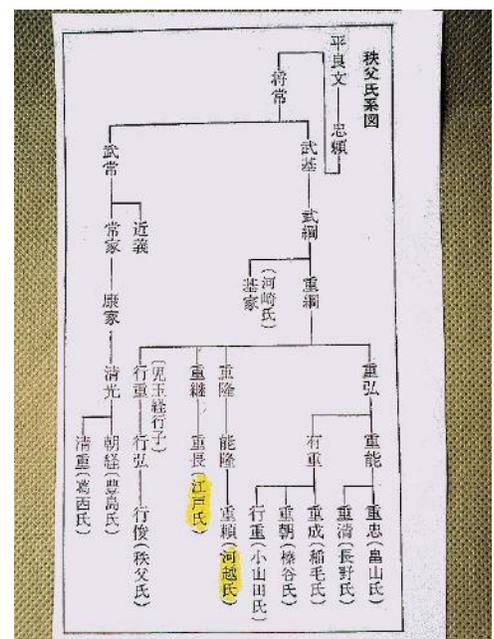
まずは、河越重隆が京の新日吉山王宮(京都市東山区)を河越に分社した。

それをまた、弟の河越重継(江戸氏の祖)が江戸に進出したとき館内に分社した。

元々の京の新日吉山王宮はもちろん日吉大社からの分社である。

話がややこしくなってきたから、整理してみよう。

- ・日吉大社＝大津市にある比叡山の守護神。
- ・比叡山延暦寺＝大津市比叡山にある天台宗の総本山。延



【江戸・河越兄弟】

暦七年、最澄が建立。

- ・京の新日吉山王宮＝1160年、後白河上皇が院の御所の守護神として、比叡山の守護神日吉社(現日吉大社)を勧請し、「新しい日吉神社」を創祀。
- ・河越の新日吉山王宮＝後白河上皇の代、河越重隆が京の新日吉山王宮を河越に分社する。
- ・現在の赤坂日枝神社＝12世紀前半期、河越重隆の弟重継(江戸氏の祖)が江戸に進出したとき河越から江戸の館内に分社したことによる。

山王社は、江戸氏以後も、江戸館の主となった太田氏・上杉氏・北条氏、そして家康によって守護されてきた。ただ、それはあくまで江戸館の守護神にすぎなかった。

それは、江戸の山王社が近江の日吉大社の曾孫みたいな軽い存在であったからである。

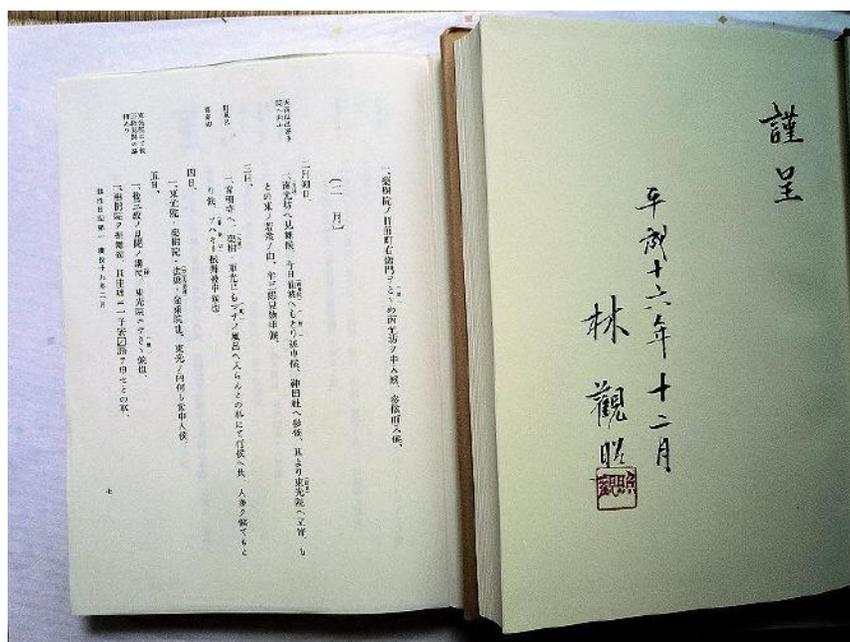
そういう具合だから、1614年ごろ慈性は山王社を訪れていないようだ。ただ、「日記」には山王祭を見学したことは記録に残している。

それでも私は、この「山王社説」を『慈性日記』の校訂をされた慈性研究家の林観照先生に申し上げたところ、「いい所に目を付けた。だが可能性はないだろう。たぶん当時はまだ山王社の塔頭として常明院はまだ建立されていなかっただろうし、仮にあったとしても、僧侶が『院』と『寺』と書き間違えるようなことはしない。他の『定明』を『常明』と書くことはあっても…、」とのことだった。

後年、天海はこの曾孫のような江戸の山王社に注目した。まずは、元和二年(1616年)に最教院を別当とした。(ただ、明暦の大火後から観理院が別当となった。)

そして寛永二年(1625年)、寛永寺を創建して「比叡山延暦寺=日吉大社」に比した「東叡山寛永寺=山王社」という権威を創造したのである。

かように、山王社(日枝神社)が重きをなすのは、1614年より後年のことであるから、注目するのは早すぎるというわけである。



【『慈性日記』】

8.もしや常明寺？(2)

話を『日記』に戻すと、慈性の江戸での宿泊先は、前述したように小伝馬町の東光院も一つであったが、よく読むと法性寺を度々宿としている。

さっそく、法性格は何処に？ と思って、寛永九年(1632年)の「豊島郡江戸庄」という古地図で確認してみると、神田川沿いに在った。



【寛永九年の神田界限】

ればいいと、胸をワクワクさせながら幻の常明寺を想像するしかないようである。

9.江戸ソバリエの務め！

ところで、このエッセイを書いているとき(2013年)に気付いたのであるが、来年の2014年は江戸蕎麦切の初見から400年目に当たる！！

さっそくながら、われわれは2014年2月に林観照先生(前大正大学専任講師)と、ゆかりの東光院32世木村周誠先生(大正大学専任講師)をお招きし、「常明寺蕎麦切について」をテーマとした第4回江戸ソバリエ・ルシック・セミナーを開催した。



【第4回江戸ソバリエ
・ルシック・セミナー】

えにある。

寺社も生き物である。長い年月の上では、大きく発展することもあれば、廃寺になったり、吸収されたりすることもある。

おそらく江戸蕎麦切初見の常明寺は波に吞まれてしまったのだろう。したがって、よほどのことがないかぎり常明寺の所在は謎のままかもしれない。

最後に一言。

大事なものは、慈性が日記に書き残してくれたお蔭で、後世のわれわれは「江戸ソバリエ初見1614年」を知ることができたということである。

受け継いで、われわれ江戸ソバリエも、こうした蕎麦文化を忘却させることのない行動をとるべきであろう。

だからこそわれわれは、

1)江戸蕎麦切400年記念・第4回江戸ソバリエ・ルシック・セミナー「常明寺蕎麦切について」

地図では、新こく町、すだ町、連じゃく町の南北に寺院が集まり、神田川沿いは寺町になっている。

北方の昌平橋・昌平坂の左側には「西福寺」「西念寺」「寺」「寺」「寺」と五ヶ寺が並ぶようにして在る。また南側の神田川筋違橋から万世橋の間には「寺家」「寺家」「せい願寺」「法おん寺」「し。しょう寺」「法しょう寺」などが並び、さらに神田川を渡ると「寺町」が存在する。

北の西福寺は父の資勝がご馳走になったことのある寺である。

慈性は、新こく町で借屋したり、法性寺では幾度も宿を借り、風呂に入ったことや、饅頭を食べたことを記録しているから、可能性は濃厚である。

したがって、北側の名前を記していない三軒の「寺」と「誓願寺」に隣接する二軒の「寺家」が気になる。他の古地図をあたって名前も不明である。ただただ「常明寺」であ

を開催し、

2)そして、このエッセイ「ソハキリ初見の『常明寺』を探す」を書き、

3)加えて、江戸におけるソハキリ初見の2月3日を「江戸蕎麦記念日」としたいと思う次第である。

《訪問先》

尊勝院(京都)、東光院(浅草)、薬樹院(大津市)、宝塔院(五反田)、寛永寺(上野)、日光東照宮(日光)、比叡山延暦寺(大津市)、日吉大社(大津市)、日枝神社(川越)、日枝神社(赤坂)、

《参考》

- ・林観照校訂『慈性日記』(続群書類従完成会)
- ・寛永寺刊『天海さま』
- ・村井益男『江戸城』(中公新書)
- ・安田元久『武蔵の武士団』(有隣新書)
- ・『集約 江戸絵図』(中央公論美術出版)
- ・野本健男『夢想 吾妻鏡』
- ・ほしひかる「江戸常明寺にて蕎麦切を振る舞われる」(『日本そば新聞』平成18年11月15日号)
- ・第4回江戸ソバリエールシック-セミナー(平成26年2月16日)

*ほしひかる ・特定非営利活動法人 江戸ソバリエ協会 理事長、
・エッセイスト

[終]